

美郷大使

松並木



坂本東嶽邸
千屋小学校



■松田町長から委嘱状を受け取る佐々木さん（写真右）

学習院大学法学部 教授
美郷大使 **佐々木 毅**

この度、美郷大使に任命され、誠に光栄に存じます。自分の生まれた地域に貢献する機会を与えられましたことを心に刻み込み、微力ながらお役に立てればと存じております。

私は昭和24年4月に千屋小学校に入学しました。当時は物資が不足し、生きるのに精一杯の時代でしたが、満開の桜の下での小学校の運動会の記憶は鮮やかに脳裏に焼き付いております。千屋中学校に入学した昭和30年に町村合併で千畑村が誕生しました。当時の千屋中学校は一学年の生徒が約200名おり、4クラスあったと記憶しております。中学になって受験というものがあること

町では、学識経験者や文化人、スポーツ選手などで、知名度の高い方々に、町の魅力の発信やまちづくりへの提言をいただくことと「美郷大使」を委嘱しました。このたび「美郷大使」に就任された3名の方々より就任に際してのごあいさつをいただきましたので、ご紹介します。



■松田町長から委嘱状を受け取る町田さん（写真右）

株式会社北都銀行取締役会長
美郷大使 **町田 睿**

去る8月25日、松田町長から栄えある「美郷大使」を拝命いたしました。元千屋村で、この世に生をうけた縁を多とされたと同いまして。今から茫々七十余年前に、共に仙北郡出身の父と母が、小学校教員同士で世帯を持ち、共働きということ、二人共千屋小学校に奉転することとなった縁が始まりです。長男の私が生まれたのは、その一年後で、お手伝いの若い娘さんに背負われた赤ん坊の写真一枚残っていますが、千屋小学校の小使室によく預けられて、母のお乳をねだっていたようです。

を知りましたが、千屋中学校では農作業やクラブ活動を楽しくさせてもらいました。当時、そろそろ日本経済の高度成長が始まり、労働力不足時代になり、農村から都会へと沢山の若者が職を求めて移動しました。いわゆる就職列車の時代です。私は進学するという事で千屋を離れ、そして昭和36年に大学に入り、その後は東京暮らしをしております。父が暫く千畑村長をしていたこともあり、千屋には年に数回帰省しておりました。また、東大総長に就任してから、千畑町や美郷町で講演する機会を与えられました。それやこれやのご縁で、今回の任命になったものと存じております。

私が千畑を去ってから大きな変化が日本社会に起こりました。余りにいろいろなことが起こったため、どうお役に立てるか考え込みますが、確かなことは、中央（東京）からの指示を待っているも期待外れに終わる時代になったということです。アイデアを出すのはそれぞれの地域であり、中央はそれを支援する役割に変わりつつあります。東京から見ていると秋田県は中央からの指示待ちの傾向が強い県の一つに見えますが、これは「ないものねだり」ではありません。遠慮はいりませんから、そうした体質からどんどん離陸して下さい。全てはそこから始まると思います。皆様との楽しい、有意義な対話の機会に恵まれますよう、祈念しております。

昨年50年振りに秋田へ戻り、生まれ故郷の千屋小学校の周辺を散策させてもらいました。父から聴いた、坂本東嶽が村の中心部に造営した杉並木と松並木の見事な街道筋を眺めながら、田園都市構想の夢の跡を感慨深く追想しました。

日本は今、アジアにおける経済大国の地位を中国に譲り渡し、成熟した国家の仲間に入ったように思われます。少子高齢化が加速し、長寿社会への本格的移行のための諸々の整備が必要となってきています。しかしながら、日本が衰退すると思えるべきではありません。物質的豊かさの量のみで、その国の価値や評価は決められません。日本国民の民度や精神の高貴さなど、日本が歩んできた歴史や培ってきた文化に誇るべきものが多くあります。そして、その多くが米を中心とした農耕文化の中から生まれ育ったものです。これからの課題は、農業を一次産業として耕すことに終始せず、加工して付加価値を高めることや、販路を海外も含め拡げていくことなど、いわゆる六次産業化へ挑戦することでしょう。さらには、過剰な競争と喧騒に病んだ都会人に、豊かな自然の恵みや癒しの機会を与える役割を担うグリーンツーリズムや介護事業に挑戦することも必要ではないでしょうか。

米どころ美郷町が、若い町長のリーダーシップのもとに、いよいよ発展されますよう祈念し、拜命の辞といたします。



町の日記念式典の記念講演
（平成18年11月）



千畑地区田園風景